

## 質問 I

### 滋賀の象 徴・琵琶湖の未来をみんなで守れ

やまだ も こ 議員（小4）、藤田 まい 議員（小6）  
やまうら さ わ 議員（小6）、山崎 こはる 議員（中2）

琵琶湖は滋賀県のシンボルであり、私たちの生活を支える貴重な資源です。

琵琶湖は上から見てみると、とてもきれいに見えます。しかし、実際に私がゴミ拾いに行った時には、岩と岩の隙間に釣りの時に使うロープや、ペットボトル等のゴミもあり、決して綺麗とは言えません。ゴミが捨てられ、放置されている問題を解決すべく、県全体で意識を高めていくことが必要だと思えます。例えば、一般社団法人が行っている環境保全のためのイベントに滋賀県の一部団体の高校生が護岸で参加しており、ゴミ拾いの量や質を競い合う活動が実施されています。しかし、このイベントは高校生のみが参加対象で、参加に制限が設けられています。そこで、より多くの県民が琵琶湖の美しい景観を未来の世代につなぎ持続可能にするために、琵琶湖をきれいにするための行動ができるようにするために、提案します。

小中学生も参加可能な「スマイルクリーンびわ湖カップ」というイベントを実施することを提案します。このイベントでは、小学生が琵琶湖でゴミ拾いを体験し、環境問題に関心を持つ機会を提供します。「スマイルクリーンびわ湖カップ」には3つの目的があります。1つ目は、小中学生が琵琶湖にどれだけのゴミがおちているかを知り環境問題に対する意識を深めること。2つ目は、学校以外で地域活動としてのごみ拾いを体験することで地域への愛着を高めること。最後に、自然と触れ合う中で、琵琶湖の存在がわたしたちの生活でどれだけ大切なのかを学ぶ機会を提供することです。

また、県民の意識をさらに高めるために、このイベントの会場で滋賀県の特産物や伝統料理の屋台を設け、全ての飲食物をリユース食器で提供することを提案します。リユース食器は繰り返し使用できるため、使い捨ての食器を削減し、環境に配慮したイベント運営が可能となります。リユース食器は祇園祭りでも使われ、ゴミ削減に効果的であることが実証されています。この取り組みによってイベント参加者にも、ゴミを減らす意識が広がり、地域全体での環境意識向上に貢献できると考えます。他にも、「ゴミゼロウォークラリー」そして子ども向けの「ゴミゼロウォークラリー」を開催します。このウォークラリーでは、会場内を巡ってゴミや環境について学ぶクイズに挑戦し、正解者にはプレゼントを用意します。遊びながら学ぶことで子どもたちの興味を引き出し、ごみ問題へ

の関心を高めることが期待できます。

その他、イベントとは別に琵琶湖の湖岸に「レンチキュラー看板」を設置することも提案します。「レンチキュラー看板」は見る角度によって異なる文字や絵が浮かび上がるという仕組みのものです。そのしくみを活用して、琵琶湖の汚染現状を表す写真と、美しい景観の写真を交互に表示することで、見た人に環境への意識を高めてもらおうと同時に、地域全体で琵琶湖保護活動への関心を促進できると考えています。

これらの取り組みを通じて、滋賀県全体で琵琶湖への意識を高め、子どもから大人まで一体となって環境保全に取り組むことが可能になります。また、MLGsの10番「地元も流域の学びの場に」という項目も達成につながると考えています。琵琶湖の美しい景観を未来の世代につなぎ持続可能な滋賀県の発展をめざす取り組みになると思うのですが、いかがでしょうか。

## 質問 2

### バリアフリートイレのあり方

あしだ 芦田 すす 議員（小5）、かわぐち 川口 司誠 議員（中1）  
しの 篠 互 議員（中1）、おおはし 大橋 星斗 議員（中2）  
もりた 森田 あいこ 愛子 議員（中2）

わたし 私たちはひとりひとりの個性が認められる過ごしやすい滋賀県になってほしいと  
おも 思っています。わたし 私たちが生活する中で過ごしにくさや、個性が認められていないと感じる  
ばめん 場面があります。僕がバリアフリートイレを使おうと思ったときに、いっばん 一般の人が先に使っ  
ていて困った経験があります。もう一方で、L G B T Q の人の中でも、特にトランスジェ  
ンダーの人はトイレの使用場所に困っています。民間企業と民間団体が日本在住の十代  
いじょう 以上の性的マイノリティの当事者を対象に、2015年11月24日から 12月24日の期間に  
じっし 実施した「性的マイノリティのトイレ問題に関するWeb調査結果」によると、トランスジェ  
ンダーの 64.9%の方が困るまたはストレスを感じると回答しています。そこで、わたし 私たち  
はすべての人が過ごしやすいバリアフリートイレの新しいあり方を提案します。

たとえば、いっばん 一般の人がバリアフリートイレを使うと迷惑に感じる人もいますが、  
エルジービィティーキュー ヒト L G B T Q の人がバリアフリートイレを使いたい時もあります。このことは、わたし 私たちが  
アレンジした L G B T Q 専用のマークを貼ることで解決すると思います。このマークは  
おうべい 欧米でよく見られる半分女性半分男性のオールジェンダーを表現したピクトグラムに、  
わたし 私たちなりに色を付けたマークです。このマークを貼る方法だと既存のバリアフリートイ  
レを活用するので、低コストで実現することが出来ます。

つぎ 次にバリアフリートイレに関するポスターについてです。こくどうつうしょう 国土交通省が ねん 2022年12月3  
か 日から ねん 2023年1月9日に行った「こうれいしゃしょうがいしゃとうしせつなど てきせりようすいしん  
のポスターを拝見したところ「必要のない方は一般トイレをご利用ください。」と記載さ  
れていました。しかし、このような表記だと L G B T Q 当事者の中で、知られたくない  
のに周りの人に当事者だと知られてしまう恐れがあります。そこで、「必要な方にお譲り  
ください」というひょうげん 表現に変更したポスターを張り出すと良いと考えました。

このような取り組みをすることで、すべての人が使いやすいトイレが増えて、これから  
あんしん 安心して住み続けられる環境になり、ひとりひとりの個性が認められ、過ごしやす  
い滋賀県になると思うのですがいかがでしょうか。

### 質問3

歴史でつながる滋賀県に—歴史体験アプリ「シガcastle」—

岡本 和弦 議員（小4）、大矢 快音 議員（中1）

力石 樹鍊 議員（中1）、河野 永遠 議員（中3）

私たちは、滋賀県が滋賀らしい、滋賀にしかできないことをもっとアピールできる県になってほしいと考えています。私の学校には、歴史について知らない友達が多くいるように感じ、友達と歴史についてもっと話しをしたいと思っています。数ある歴史の中でも、特に滋賀県には数多くの城があるのですが、その中には知名度があまりない城も多くあるのが現状です。例えば彦根城や安土城といった天守で構成される城は有名ですが、三雲城や鎌刃城といった山に築かれた天守のない城である山城は、あまり知られていません。滋賀県には全国的に見ても山城が多く、そこにはとても魅力が集まっています。しかし、多くの人に注目されている城は彦根城などの天守のある城がとて多いと感じています。そこで、本当にみんな知らないのか、実際に子ども議員全員に、三雲城と鎌刃城について、知っているかどうかを聞いてみました。結果はなんと、三雲城82%、鎌刃城71%の子ども議員が知りませんでした。

このような結果から、私たちは滋賀の山城をたくさんの人に知ってもらい、私たちの周りにも歴史の面白さを感じる人が増え歴史でたくさんの人がつながれるように提案します。まず、私たちはV Rを使った手法で、滋賀の山城を復元させるアプリ「シガcastle」を提案します。V Rとはコンピューターによって作り出された仮想的な空間を現実であるかのように疑似体験できる仕組みのことです。V Rを利用して当時の山城アプリで復元させます。それでは皆さん、自分の手で望遠鏡のような形を作って、両眼に近づけてください。そして、パネルを見てください。これは現在の小谷城跡の様子です。これがV Rで当時の姿に復元されるとこのようになります。このような光景が本当に目の前に広がると考えると、わくわくしませんか。

さらにこのアプリでは子どもも大人も楽しめるアプリにするために、ゲーム機能や学習機能を加えたアプリにしようと考えています。ゲーム機能では滋賀にある山城の歴史をモデルにした城取り合戦のようなRPGゲームを取り入れます。また、学習機能ではクイズ形式で、誰もが楽しくわかりやすく学べるようにします。そして、このアプリを多くの人に利用してもらうためにYouTubeやInstagramなどのSNSに流れてくる広告を発信します。このアプリの様々な機能により、城への興味を高め、滋賀にある有名な城もマイナーな城も、より知名度を上げられると考えられます。そして、私たちの周りにも歴史の面白さを感じる人が増え、歴史でたくさんの人がつながる滋賀県に成長していくと思うのですがいかがでしょうか。

## 質問 4

ホテルで<sup>あふ</sup>溢れ、<sup>えがお</sup>笑顔と<sup>かん</sup>ワクワク感に<sup>み</sup>満ちた<sup>しがけん</sup>滋賀県

～ホテルUPプロジェクト～

<sup>おかだ</sup>岡田 <sup>かほ</sup>果歩 議員（小4）、<sup>いしかわ</sup>石川 <sup>まどか</sup>円花 議員（小6）

<sup>すずき</sup>鈴木 さくら 議員（中1）

<sup>わたし</sup>私たちは、<sup>しがけん</sup>滋賀県がホテルで<sup>あふ</sup>溢れ<sup>えがお</sup>笑顔と<sup>かん</sup>ワクワク感に<sup>み</sup>満ちた<sup>けん</sup>県になってほしいと思っ  
ています。<sup>しがけん</sup>滋賀県の<sup>ゆた</sup>豊かな<sup>しぜん</sup>自然がより一層<sup>いっそう</sup>蘇<sup>え</sup>り、<sup>おほ</sup>多くの<sup>けんみん</sup>県民が<sup>かんどう</sup>ワクワクと<sup>あじ</sup>感動を味わう  
ことができる<sup>かんきょう</sup>環境になればいいなと思います。そこで、<sup>わたし</sup>私たちが<sup>ていあん</sup>提案するのは、ホテル  
の増加に向けた「ホテルUPプロジェクト」を<sup>まいばらし</sup>提案します。<sup>もりやまし</sup>米原市や<sup>おほ</sup>守山市は、ホテルが多  
く<sup>せいそく</sup>生息していると<sup>い</sup>言われていますが、<sup>ねんねんげんしょう</sup>年々<sup>もりやまし</sup>減少しています。<sup>エヌピーオーほうじん</sup>守山市にある「NPO法人び  
わこ<sup>ほうじょう</sup>豊稔の里」の<sup>さと</sup>調査によると「ホテルの<sup>もりしりょうかん</sup>森資料館」<sup>しゅうへん</sup>周辺で、<sup>ねん</sup>2014年度の<sup>ひしやうすう</sup>ホテル飛翔数  
は<sup>ひき</sup>3,474匹だったのに対し<sup>たい</sup>2018年には<sup>ねん</sup>2,545匹と<sup>ひき</sup>929匹も<sup>げんしょう</sup>減少してしまいました。  
<sup>ねん</sup>2025年の<sup>もくひやうひしやうすう</sup>目標飛翔数は<sup>ひき</sup>5,000匹なのですが、<sup>もくひやうすう</sup>目標数を<sup>いま</sup>今でも<sup>したまわ</sup>下回っています。ホテル  
で<sup>ゆうめい</sup>有名な<sup>まいばらし</sup>米原市の<sup>でがわ</sup>出川では、<sup>もっと</sup>最も<sup>おほ</sup>多かった<sup>とし</sup>年の<sup>びき</sup>1381匹から<sup>きんねん</sup>近年は<sup>げんしょう</sup>減少し、<sup>ねん</sup>2023年は<sup>びき</sup>8  
93匹となっています。<sup>びわこ</sup>琵琶湖や<sup>いけ</sup>池などでは、<sup>はっせい</sup>アオコが<sup>すく</sup>発生することとも少なくありません。

また、<sup>えいきやう</sup>コロナウイルスの<sup>こうれいか</sup>影響や<sup>ちいき</sup>高齢化により<sup>まつ</sup>地域の<sup>ちゅうし</sup>ホテル祭りが<sup>げんじやう</sup>中止になっています  
<sup>げんじやう</sup>現状があります。ホテルの<sup>ひかり</sup>光は<sup>けんみん</sup>県民を<sup>いや</sup>癒し、<sup>かんきやうほぜん</sup>環境保全への<sup>かんしん</sup>関心をもたらし、<sup>ちいき</sup>地域の<sup>かつせいか</sup>活性化  
にもつながるのではないかと<sup>かんが</sup>考えます。<sup>ちいきぜんたい</sup>ですので、<sup>ふ</sup>地域全体で<sup>しがけん</sup>ホテルを増やし、<sup>ま</sup>滋賀県を  
ホテルが<sup>うつく</sup>舞う、<sup>まち</sup>美しい街にするための<sup>とく</sup>取り組みが<sup>ひつよう</sup>必要だと<sup>かんが</sup>考えます。<sup>とく</sup>その<sup>れい</sup>取り組みの例  
として、<sup>かつどう</sup>2つの<sup>はしら</sup>活動を<sup>かつどう</sup>柱として<sup>おも</sup>活動していきたいと思ひます。

まず1つ目は<sup>め</sup>交流会の<sup>こうりゅうかい</sup>イベントの<sup>かいさい</sup>開催です。<sup>しまち</sup>市町を<sup>こ</sup>越えた<sup>こうりゅう</sup>交流の場として<sup>ば</sup>ホテルの  
<sup>ほご</sup>保護や<sup>せいそくかんきやう</sup>生息環境の<sup>せいび</sup>整備について、<sup>こ</sup>子どもから<sup>おとな</sup>大人まで<sup>とも</sup>共に<sup>かんが</sup>考える<sup>じっし</sup>イベントを実施します。  
さらに、<sup>ようじ</sup>幼児も<sup>たの</sup>楽しめるよう、<sup>さまざま</sup>様々な<sup>たいけん</sup>体験ブースを<sup>せっち</sup>設置します。また、「ホテル週間」を  
<sup>もう</sup>設け、<sup>しゅうまつ</sup>週末に<sup>かいさい</sup>イベントを開催することで<sup>けんないがい</sup>県内外からの<sup>かんしん</sup>関心を集め、<sup>あつ</sup>県外からの<sup>けんがい</sup>来場者に  
も<sup>さんか</sup>参加していただけるような<sup>ば</sup>場にしたいと<sup>かんが</sup>考えています。この<sup>こうりゅうかい</sup>交流会は<sup>し</sup>滋賀の<sup>みらい</sup>未来を<sup>にな</sup>担  
う<sup>こ</sup>子ども<sup>ぎいん</sup>議員が<sup>しかい</sup>司会を務めることで、<sup>つと</sup>地域への<sup>ちいき</sup>愛着と<sup>あいちゃく</sup>次世代<sup>じせだい</sup>リーダーの<sup>いくせい</sup>育成にもつながり  
ます。

次に、<sup>つぎ</sup>環境保全活動の<sup>かんきやうほぜんかつどう</sup>実施です。<sup>じっし</sup>ホテルが<sup>せいそく</sup>生息しやすい<sup>かんきやう</sup>環境を整えるために、<sup>かわ</sup>川やそ  
の<sup>しゅうへん</sup>周辺の<sup>せいそうかつどう</sup>清掃活動を<sup>つき</sup>月に一度<sup>い</sup>行う<sup>よてい</sup>予定です。<sup>ひろ</sup>ゴミ拾いや<sup>ひつよう</sup>必要に応じた<sup>おう</sup>草刈りを<sup>くさか</sup>行い、<sup>おほ</sup>よ  
り<sup>かた</sup>多くの<sup>かつどう</sup>の方が<sup>さんか</sup>活動に<sup>くふう</sup>参加できる工夫を<sup>かんが</sup>したいと<sup>さんかしゃ</sup>考えています。<sup>けいひん</sup>参加者には<sup>し</sup>景品を<sup>かんきやう</sup>プレゼン  
し、「また<sup>さんか</sup>参加したい」と<sup>おも</sup>思っていただけ<sup>しく</sup>の<sup>と</sup>仕組みを<sup>い</sup>取り入れます。<sup>せいそうかつどう</sup>清掃活動と<sup>どうじ</sup>同時に<sup>かんきやう</sup>環境

やホテルの生態<sup>せいたい</sup>について学ぶ<sup>まな</sup>機会<sup>きかい</sup>を提供<sup>ていきょう</sup>する「勉強系<sup>べんきょうけい</sup>ワークショップ」も開催<sup>かいさい</sup>し、関心<sup>かんしん</sup>を高めたいです。

この2つの活動<sup>かつどう</sup>を通して、滋賀県<sup>しがけん</sup>のいたるところでホテルを軸<sup>じく</sup>にした取り組み<sup>とりくみ</sup>ができるような自然環境<sup>しぜんかんきょう</sup>を取り戻<sup>と</sup>したいです。ホテルの住む環境<sup>すかんきょう</sup>が整<sup>ととの</sup>えば、環境<sup>かんきょう</sup>や地域<sup>ちいき</sup>を大事<sup>だいじ</sup>にしようと思う観点<sup>おもかんてん</sup>から県民<sup>けんみん</sup>一人一人が滋賀県<sup>しがけん</sup>に対して誇り<sup>ほこ</sup>や愛着<sup>あいちゃく</sup>を感じる地域<sup>かんちいき</sup>づくりをしようということにつながるとおもいます。また、プロジェクトの内容<sup>ないよう</sup>をまとめた冊子<sup>さつし</sup>を作成<sup>さくせい</sup>し、ホテルの増加<sup>ぞうか</sup>に向けた取り組み<sup>とりくみ</sup>を広く共有<sup>ひろきょうゆう</sup>したいです。これらの取り組み<sup>とりくみ</sup>を通してて、ホテルであふれ笑顔<sup>えがお</sup>とワクワク感<sup>かん</sup>に満ちた滋賀県<sup>しがけん</sup>になると思うのですが、いかがでしうか。

## 質問5

だれ あんしん す いばしよ  
誰もが安心して過ごせる居場所

ひきだ あかる やまだ ごろう  
足田 明瑠 議員（小5）、山田 伍郎 議員（小6）

わたし だれ あんしん す し が けん おも  
私たちは、誰もが安心して過ごせる滋賀県になってほしいと思います。

わたし ちい きたいけんかつどう い シン ス こうこうせい だいがくせい  
私たちは、地域体験活動で行ったフリースクールの「SINCE」や高校生や大学生の  
いばしよ イッテキ はなし き さまざま み ふとうこう ひと ふ  
居場所「itteki」で話を聞き、様々なデータを見て、不登校になっている人がどんどん増  
えていることを知りました。文部科学省が実施した「令和5年度 児童生徒の問題行動・  
ふとうこうとうせいとしどうじょう しょかだい かん ちょうさけっか ぜんこく しょうちゅうがっこう ふとうこう  
不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」によると全国の小中学校で不登校と  
はんだん じどうせいと ことさいた こうしん ねんど ぜんねんど やく まん せんにんうまわ  
判断された児童生徒は過去最多を更新しました。2023年度は、前年度を約4万7千人上回  
る 346,482人で、11年連続で増加しています。フリースクール等民間施設は、全国的に  
ひろ ぶとうこう ひと い かず  
も広がってきているようですが、不登校の人みんなが行くことができる数はありません。  
このことを知り、多くの人々が悩みを抱えていて、そのような人が減って欲しいと思い、誰  
もが安心して過ごせる居場所を増やしたいと思いました。また、不登校の人以外にも困っ  
ている人がいます。私たちが提案する居場所は、誰もが抱えている悩みや不安を気軽に  
そうだん しせつ ふとうこう ひと しょうがい も ひと としよ ひと にんぶ じず  
相談できる施設です。不登校の人も、障害を持った人も、お年寄りの人も、妊婦さんも静  
かに自分の時間を過ごすことができたり、からだ うご なや ふあん きがる  
に相談できる居場所を提案します。

わたし かんが しせつ とくちょう め もり なか みどりゆた  
私たちが考える施設には、3つの特徴があります。1つ目は、森の中にあり緑豊か  
な場所・静かな場所であることです。なぜなら、緑は落ち着くし、癒しになると思うから  
です。また、め み ひと おお き ゆ おと き おち つ おも  
目が見えない人も大きな木が揺れる音を聞き、落ち着くことができると思  
います。

め そうだん ばしよ きかい じゅうじつ なや ふあん だれ はな  
2つ目は、相談できる場所や機会が充実していることです。悩みや不安も誰かに話すこ  
とができることはいいことだと思うので、不登校の人や妊婦さん、お年寄り、悩みや不安  
をかか ひと だれ こ よ しず す  
を抱えている人、誰でもみんなが来られると良いと考えます。また、静かに過ごすことが  
できる部屋やいろんな人とお話することができる部屋などを分けるなどの工夫をして作  
ることで、それぞれの人にとって居心地のいい、行きたいと思える場所になると思います。

また、お年寄りは人生のベテランでもあるので、悩みを抱えている人の良い相談相手に  
なってくれるかもしれません。また、部屋を分けることで、みんな同じ場所に来ることで  
う まれる 危険や、いきづらさを防ぐ狙いもあります。

め 3つ目は、リラックスできる空間になっていることです。お花を飾ったり、壁の色を明  
るくしたりすると、あか き も おも おながく なが  
明るい気持ちになれると思います。また、音楽を流したり、みんなが

たの 楽しむゲームがあつたりすると楽しい気持ちになれると思います。このような誰もが  
あんしん いご 心地のいい施設を増やすことで、困っている人が気軽に利用できる居場所の一  
つになり、なや ふあん へ だれ あんしん す しがけん おも  
かがででしょうか。

## 質問 6

チルドレン Childrenシガ ～守ろう苦しむたくさんの子どもを～

こうの とわ 河野 永遠 議員（中3）

わたし は、しがけん 滋賀県に<sup>こ</sup>住むたくさんの子どもたちが<sup>えがお</sup>笑顔に暮らしてほしいと<sup>かんが</sup>考えています。

みなさんは、<sup>じどうぎゃくたい</sup>児童虐待にどのようなイメージを持っていますか。おそらく、ここにいるほとんどのみなさんが「<sup>ぎゃくたい</sup>虐待」というワードを聞いた時に、<sup>き</sup>暴力行為など<sup>しんたいてき</sup>身体的に<sup>えいきょう</sup>影響が強い行動をイメージされたと思います。確かに、<sup>しんたいてきぎゃくたい</sup>身体的虐待はその証拠が<sup>しょうこ</sup>体に出るので、<sup>ぎゃくたい</sup>虐待にあっていて<sup>まわ</sup>周りの人に<sup>ひと</sup>気づかれやすいのかもしれない。

しかし、<sup>じどうぎゃくたい</sup>児童虐待には<sup>しんたいてきぎゃくたいがい</sup>身体的虐待以外にもたくさんのパターンがあります。そのうちの1つが<sup>しんりてきぎゃくたい</sup>心理的虐待です。<sup>しんりてきぎゃくたい</sup>心理的虐待とは、子どもに<sup>こ</sup>精神的な苦痛を与え、<sup>じそんしん</sup>自尊心を傷つけるということを指します。<sup>しんたいてきぎゃくたい</sup>身体的虐待と比べ、<sup>しんりてきぎゃくたい</sup>心理的虐待はその<sup>えいきょう</sup>影響が<sup>からだ</sup>体などに<sup>あらわ</sup>現れないため、<sup>まわ</sup>周りの人に<sup>ひと</sup>気づかれにくいのです。こども家庭庁が令和4年度の<sup>じどうそうだんじょ</sup>児童相談所による<sup>じどうぎゃくたい</sup>児童虐待相談対応件数(速報値)で<sup>そくほうち</sup>発表している<sup>しんりてきぎゃくたい</sup>心理的虐待の相談対応件数は12万9484件。これは<sup>ぜんたい</sup>全体の59.1%にのぼり、<sup>ぜんねんどひ</sup>前年度比4,760件の増加となっています。<sup>しがけん</sup>滋賀県でも、<sup>しんりてきぎゃくたい</sup>令和4年度<sup>じどうぎゃくたい</sup>滋賀県における<sup>じどうぎゃくたい</sup>児童虐待相談対応件数等を見ると、<sup>しんりてきぎゃくたい</sup>心理的虐待は3,265件と<sup>そうだんないよう</sup>相談内容の中でも<sup>なか</sup>最も多く、<sup>しんりてきぎゃくたい</sup>心理的虐待によって<sup>くる</sup>苦しむ子どもの数が<sup>おお</sup>多いのが<sup>げんじょう</sup>現状です。

<sup>き</sup>まわりから<sup>ぎゃくたい</sup>気づかれにくい虐待を受けて<sup>う</sup>苦しむ子どもを<sup>こ</sup>少しでも減らしたい。<sup>すこ</sup>子どもの<sup>えがおあふ</sup>笑顔溢れる<sup>しがけん</sup>滋賀県であってほしい。そんな思いからわたしは、<sup>しんりてきぎゃくたいせんもん</sup>心理的虐待専門の<sup>そうだんまどぐち</sup>相談窓口

「Childrenシガ」の開設を提案します。

「Childrenシガ」には、主に3つの<sup>とくちょう</sup>特徴があります。

1つ目は、<sup>め</sup>LINEを利用した<sup>りよう</sup>相談窓口<sup>そうだんまどぐち</sup>だということです。<sup>いっばんきぎょう</sup>一般企業が(株式会社教育ネットは)2023年4月から2024年3月にかけて、<sup>ねん</sup>ネット利用における<sup>ねん</sup>実態調査<sup>りよう</sup>を行い、<sup>しょうがくせい</sup>小学生・<sup>ちゅうがくせい</sup>中学生が<sup>しょう</sup>使用している<sup>エスエヌエス</sup>SNSの<sup>りようりつ</sup>利用率<sup>ちゅうがく</sup>で<sup>ねんせい</sup>中学3年生の93%が<sup>ライン</sup>LINEを利用しています。<sup>わたし</sup>私の<sup>かよ</sup>通う<sup>ちゅうががつこう</sup>中学校の<sup>ねんせい</sup>3年生124名にとった<sup>めい</sup>アンケートによると、<sup>ぎゃくたい</sup>虐待やいじめを<sup>そうだん</sup>相談する<sup>まどぐち</sup>窓口があることを<sup>し</sup>知っている人は<sup>ひと</sup>約61.3%でしたが、<sup>なか</sup>その中で、<sup>ライン</sup>LINEに<sup>とっか</sup>特化した<sup>そうだんまどぐち</sup>相談窓口があることを<sup>し</sup>知っている人は、<sup>ひと</sup>約39.5%にとどまりました。<sup>ライン</sup>LINEを利用することにより、<sup>そうだん</sup>相談する<sup>ゆうき</sup>勇気<sup>も</sup>を持って<sup>ひと</sup>ない人でも<sup>きがる</sup>より気軽に<sup>そうだん</sup>相談できる<sup>かんきょう</sup>環境<sup>つく</sup>を作ることができま

すが、その<sup>にんちすう</sup>認知数は<sup>すく</sup>まだまだ<sup>げんじょう</sup>少ないのが<sup>ちルドレン</sup>現状です。そのため、この「Childrenシガ」から<sup>ライン</sup>LINE形式の<sup>けいしき</sup>相談窓口<sup>そうだんまどぐち</sup>という<sup>せんたくし</sup>選択肢<sup>おお</sup>を<sup>ひと</sup>多くの人に<sup>ひろ</sup>広めてはどうでしょうか。

2つ目は、窓口<sup>め</sup>に常時<sup>まどぐち</sup>心理<sup>じょうしんり</sup>カウンセラー<sup>はいち</sup>を配置<sup>はいち</sup>することによって、相談<sup>そうだん</sup>受付<sup>うけつけ</sup>直後<sup>ちよくご</sup>にカウンセリング<sup>う</sup>を受けることができる仕組み<sup>しく</sup>を整<sup>ととの</sup>えるということです。そうすることで、過度<sup>かど</sup>に焦<sup>あせ</sup>らず、ゆっくりと対応<sup>たいおう</sup>することができるので、利用者<sup>りようしゃ</sup>が安心<sup>あんしん</sup>して相談<sup>そうだん</sup>ができる環境<sup>かんきょう</sup>が整<sup>ととの</sup>います。

3つ目は、虐待<sup>め</sup>通告<sup>ぎゃくたい</sup>用<sup>つうこく</sup>フォーム<sup>ていこうかん</sup>の設置<sup>せっち</sup>です。このことによって、通告<sup>つうこく</sup>することへの抵抗<sup>ていこうかん</sup>感が小さくなり、例えば、保護<sup>ちい</sup>者<sup>たと</sup>自<sup>ほ</sup>ら<sup>ご</sup>の告白<sup>しゃみずか</sup>や、周囲<sup>こくはく</sup>の人が虐待<sup>しゅうい</sup>されてい<sup>ひと</sup>る子ども<sup>ぎゃくたい</sup>のこ<sup>こ</sup>の事を知らせ、すぐに適切<sup>し</sup>な対応<sup>てきせつ</sup>が取りやすくな<sup>たいおう</sup>ると考<sup>と</sup>えられます。

「Childrenシガ」を設置<sup>せっち</sup>することによって、心理<sup>しんり</sup>的<sup>てき</sup>虐待<sup>ぎゃくたい</sup>に苦し<sup>くる</sup>む滋賀<sup>しが</sup>県<sup>けん</sup>の子<sup>こ</sup>どもが気<sup>き</sup>軽<sup>がる</sup>に、そして安心<sup>あんしん</sup>して相談<sup>そうだん</sup>できるような環境<sup>かんきょう</sup>が整<sup>ととの</sup>い、多<sup>おお</sup>くの子<sup>こ</sup>どもが笑<sup>わら</sup>って生活<sup>せいかつ</sup>できる未<sup>み</sup>来<sup>らい</sup>を實現<sup>じつげん</sup>でき<sup>おも</sup>うのですが、いかがでしょうか。

## 質問 7

滋賀の知られざる魅力を伝える二次元コード

|    |    |         |    |    |        |
|----|----|---------|----|----|--------|
| 岡野 | 綾  | 議員（小4）、 | 上坂 | 風翔 | 議員（小4） |
| 北川 | 尚樹 | 議員（小5）、 | 後藤 | 由乃 | 議員（小5） |
| 地村 | 果純 | 議員（小6）、 | 内藤 | 行人 | 議員（小6） |
| 東條 | 瑠里 | 議員（中1）、 | 村上 | 由衣 | 議員（中3） |

私たちは滋賀県の魅力をたくさんの人に知ってもらい観光客が増え、地域活性化につな  
げたいと思っています。私たちの住んでいる滋賀県は全国的にみても魅力度ランキングが  
低く、宿泊客も周りの府県と比べても少ないです。実際に私たちも、滋賀県の観光名所  
などがあまりテレビで取り上げられていないと感じることがありました。また、実際に子ど  
も議員やサポーターにアンケートをとったところ、たくさんの人が観光名所の「河内の風穴」  
や「永原御殿」の存在を知らないと答えました。そこで私たちはたくさんの観光客が訪  
れる彦根城やラコリーナ、2025年に滋賀県で開催される国スポ・障スポ大会の会場など  
に、「滋賀の知られざる魅力を伝える二次元コード」として、二次元コード付きのポスター  
を設置することを提案します。

このポスターは滋賀県を湖西、湖東、湖南、湖北の四つの地域に分け、それぞれのエリア  
に1つずつ二次元コードがついています。この二次元コードを読み取ると、そのエリアの  
観光名所の紹介のほか、クイズや住所、さらに周辺のお店の紹介が書かれています。

どんなことを載せるか、いくつか紹介します。まず、「三井寺の妖怪伝説」です。昔、  
三井寺と延暦寺は対立していて、三井寺の僧（お坊さん）、頼豪（らいごう）が鉄の歯を持つ、  
ネズミの妖怪に化けて、延暦寺に復讐したという歴史があります。これが鉄鼠（てっそ）  
の伝説です。現在でも、「比叡山摩訶不思議伝説ウォーク」という妖怪伝説のあるお寺を回  
るスタンプラリーが行われています。

次に、膳所焼という焼き物を紹介します。膳所焼は津市の膳所のあたりに伝わる焼き  
物です。近江国膳所藩主の菅沼 定芳（すがぬま さだよし）が現在の相模川河口あたりに窯  
を開いたのが始まりと言われています。当時は、将軍徳川家光への献茶に用いられる、茶器  
として天下にその名が知られるほど有名でした。

他にも、湖西、湖東、湖南、湖北の四つの地域をすべて楽しめるような取り組みとして、

「滋賀県城スタンプラリー」も楽しめます。滋賀県には昔、千を超える城がありました。しかし、それを知る人は少ないと思います。私は滋賀県にはたくさんの歴史ある城があることを知ってもらいたいです。先ほどの歴史チームの提案でも発表した鎌刃城や三雲城も、知ってもらいたいです。また、城を訪れると地域通貨のビワコが貯まっていくようにするのはどうでしょうか。また、スマホでも紙でもできるようにすれば大人も子どもも楽しめます。

このように、二次元コードを読み取った先には、滋賀の知られざる魅力を伝える内容がたくさんあります。このポスターをたくさんの方が訪れる所や2025年に開催される国スポ・障スポ大会でも飾り、出場する選手やお客様にも知ってもらいたいです。たくさんの方が滋賀の知られざる観光名所に行ってくれる上に、知名度が上がり、観光客が増え、地域活性化にもつながると思うのですがいかがでしょうか。

## 質問 8

### 農薬減少と米の生産量アップについて

原 縁 議員（小4）、永江 広奈 議員（小6）

私は、最近米の生産量が減っているというニュースを聞いて心配になりました。

僕は生き物が好きです。生き物も住みやすい環境を保てる農業に興味を持ちました。また、農薬が多く使われると、体や生き物に悪いことだと知ってもらいたいと思いました。そこで、わたしたちは、オーガニック米の生産量が増えてほしいと思います。

僕の住んでいる日野町では月に一回オーガニック米が給食に出ます。それを食べて「美味しい」と感じ、「滋賀県全体に広がって欲しい」と思いました。日本は国連食糧農業機関（FAO）加盟の主要国で2020年の耕地面積1ヘクタール当たりの国別農薬使用量で7位です。健康や環境のことを考えると、できるだけ農薬を減らす方が良いと思います。

また、若い農家が減ったり米の収穫量が減ったりしています。農林水産省の農業生産に関する統計（農林業センサス）によると、基幹的農業従事者における10代から50代（49歳以下）の割合は、近年減少傾向にあります。2020年（令和2年）の農林業センサスによれば、49歳以下の基幹的農業従事者は全体の11%（約14万7千人）です。一方、65歳以上の基幹的農業従事者は全体の70%（約94万9千人）を占めており、高齢化が進行しています。また、米の生産量に関しても2013年の860.3万トンから2022年の726.9万トンへと、約133.4万トン減少しています。この減少の背景には、国内の米需要の減少や農業従事者の高齢化、農地の減少などが影響しています。

これら2つの思いや、現状を解決し、農薬減少と米の生産量アップ、若手の農家を増やすために、提案します。

1つ目は、大人も子どもも参加できる無農薬のコメ作りや野菜作りを体験するイベントを提案します。体験を通して農薬に頼らない栽培方法や農業のICT化について知ってもらうイベントです。イベントを通じてオーガニック米作りが広がり、米づくりに関心を持ち、良いと思う人が増えれば、将来、農家になりたいという人が増えると思います。

2つ目は、形が少しびつだったり傷があったりする野菜や果物もおおいしく食べられることを知ってもらい、購入者が増えれば農薬を使う必要が少なくなり、減らすことができると思います。

こうした取り組みで、無農薬のお米や野菜を作る農家が増えれば良いなと思います。そし

て、あんしんしてこめがてにはい入るかんきょう環境になり、常につね人ひとやかんきょう環境にやさ優しいやさい野菜やこめ米をか買う人ひとが増える  
みらい未来になれば、わかて若手もふ増えて、じぞくかのう持続可能なのうぎょう農業やしゃかい社会おもづくりにつながると思ひますがいか  
がでしょうか。

## 質問 9

誰<sup>だれ</sup>もが過<sup>す</sup>ごしやす<sup>てい</sup>いバス停<sup>ため</sup>にする<sup>ため</sup>に

村上<sup>むらかみ</sup> 由衣<sup>ゆい</sup> 議員<sup>ぎいん</sup>（中<sup>ちゅう</sup>3<sup>さん</sup>）

私<sup>わたし</sup>は、滋賀<sup>しが</sup>県内<sup>けんない</sup>全<sup>すべ</sup>てのバス停<sup>てい</sup>を誰<sup>だれ</sup>もが使い<sup>つか</sup>やすく、過<sup>す</sup>ごしやす<sup>てい</sup>いバス停<sup>ため</sup>にしたいと思<sup>おも</sup>います。私<sup>わたし</sup>は毎日<sup>まいにち</sup>登<sup>のぼ</sup>り下<sup>くだ</sup>校<sup>こう</sup>で市<sup>し</sup>が運<sup>うん</sup>営<sup>えい</sup>するコ<sup>こ</sup>ミュニティバ<sup>に</sup>スを利用<sup>りよう</sup>していま<sup>ま</sup>すが、待<sup>まち</sup>ち時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>に  
も<sup>も</sup>っと過<sup>す</sup>ごしやす<sup>てい</sup>いバス停<sup>ほ</sup>にな<sup>かんが</sup>って欲<sup>た</sup>しいと考<sup>まな</sup>え<sup>つ</sup>ていま<sup>とく</sup>す。例<sup>たと</sup>え<sup>ば</sup>、真<sup>ま</sup>夏<sup>なつ</sup>の<sup>げ</sup>下<sup>こう</sup>校<sup>じかん</sup>時<sup>とく</sup>間<sup>かん</sup>は特<sup>とく</sup>  
に暑<sup>あつ</sup>い<sup>あつ</sup>ですが、バ<sup>ほん</sup>ス<sup>すう</sup>の本<sup>すく</sup>数<sup>あつ</sup>が少<sup>た</sup>なく暑<sup>あつ</sup>さ<sup>た</sup>に耐<sup>ま</sup>え<sup>い</sup>な<sup>ちど</sup>が<sup>じゅう</sup>ら<sup>ぶん</sup>バスを待<sup>まち</sup>ていま<sup>ま</sup>す。一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>、十<sup>じゅう</sup>分<sup>ぶん</sup>な  
水<sup>すい</sup>分<sup>ぶん</sup>補<sup>ほ</sup>給<sup>きゅう</sup>、熱<sup>ね</sup>中<sup>ちゅう</sup>症<sup>しょう</sup>対<sup>たい</sup>策<sup>さく</sup>を<sup>すく</sup>して<sup>あつ</sup>いた<sup>た</sup>に<sup>かか</sup>も<sup>かる</sup>関<sup>ね</sup>わ<sup>ちゅう</sup>ら<sup>しょう</sup>ず<sup>しょう</sup>軽<sup>か</sup>い<sup>か</sup>熱<sup>ね</sup>中<sup>ちゅう</sup>症<sup>しょう</sup>にな<sup>ま</sup>って<sup>い</sup>し<sup>ま</sup>った<sup>が</sup>こ<sup>と</sup>が<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>した。他<sup>ほか</sup>に<sup>も</sup>、も<sup>の</sup>の<sup>す</sup>ご<sup>い</sup>大<sup>おお</sup>雨<sup>あめ</sup>の<sup>とき</sup>に<sup>や</sup>屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>が<sup>な</sup>く<sup>て</sup>び<sup>し</sup>ょ<sup>ぬ</sup>濡<sup>ぬ</sup>れ<sup>に</sup>な<sup>な</sup>った<sup>り</sup>、お<sup>お</sup>ば<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>ちゃん<sup>ちゃん</sup>  
が<sup>つか</sup>疲<sup>つか</sup>れて<sup>い</sup>る<sup>の</sup>に<sup>ベン</sup>チ<sup>チ</sup>が<sup>な</sup>く、<sup>すわ</sup>座<sup>すわ</sup>る<sup>こ</sup>と<sup>が</sup>で<sup>き</sup>ず、し<sup>しん</sup>ど<sup>ど</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>バス</sup>を<sup>まち</sup>て<sup>い</sup>る<sup>姿</sup>を<sup>すがた</sup>  
見<sup>み</sup>たり<sup>した</sup>こ<sup>と</sup>が<sup>あ</sup>り、友<sup>とも</sup>達<sup>だち</sup>と<sup>も</sup>「屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>が<sup>あ</sup>った<sup>ら</sup>。」「ベン<sup>ベン</sup>チ<sup>チ</sup>が<sup>あ</sup>った<sup>ら</sup>。」と<sup>なん</sup>ど<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>話<sup>はな</sup>  
し<sup>て</sup>き<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。

こ<sup>こ</sup>の<sup>よう</sup>な<sup>こ</sup>と<sup>から</sup>、普<sup>ふ</sup>段<sup>だん</sup>バ<sup>り</sup>ス<sup>りよう</sup>を<sup>かた</sup>利<sup>こう</sup>用<sup>れい</sup>する<sup>あし</sup>方<sup>こし</sup>、高<sup>たか</sup>齢<sup>れい</sup>者<sup>しや</sup>の<sup>かた</sup>方<sup>あし</sup>、足<sup>あし</sup>腰<sup>こし</sup>な<sup>ど</sup>が不<sup>ふ</sup>自<sup>じ</sup>由<sup>ゆう</sup>な<sup>かた</sup>方<sup>ちい</sup>、小<sup>こ</sup>さ<sup>い</sup>  
い<sup>こ</sup>子<sup>こ</sup>ども<sup>も</sup>を<sup>つ</sup>連<sup>つ</sup>れ<sup>て</sup>い<sup>る</sup>方<sup>かた</sup>な<sup>ど</sup>、全<sup>すべ</sup>て<sup>ひ</sup>の<sup>ひと</sup>人<sup>す</sup>が<sup>てい</sup>過<sup>てい</sup>ご<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>やす<sup>い</sup>バ<sup>バス</sup>ス<sup>ス</sup>停<sup>てい</sup>にな<sup>な</sup>る<sup>とい</sup>い<sup>お</sup>と<sup>おも</sup>い<sup>ま</sup>す。そ<sup>そ</sup>  
こ<sup>こ</sup>で<sup>わ</sup>私<sup>わたし</sup>は、滋<sup>しが</sup>賀<sup>けん</sup>県<sup>ない</sup>内<sup>すべ</sup>全<sup>すべ</sup>て<sup>てい</sup>の<sup>や</sup>バ<sup>バス</sup>ス<sup>ス</sup>停<sup>てい</sup>に<sup>や</sup>屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>、<sup>せ</sup>ベン<sup>ち</sup>チ<sup>ち</sup>を<sup>てい</sup>設<sup>あ</sup>置<sup>ん</sup>する<sup>すべ</sup>こ<sup>と</sup>を<sup>てい</sup>提<sup>あ</sup>案<sup>ん</sup>しま<sup>す</sup>す。全<sup>すべ</sup>て<sup>すべ</sup>の<sup>バ</sup>ス<sup>ス</sup>  
停<sup>てい</sup>に<sup>や</sup>屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>を<sup>せ</sup>設<sup>ち</sup>置<sup>ち</sup>する<sup>あ</sup>こ<sup>と</sup>で<sup>あ</sup>雨<sup>あめ</sup>や<sup>ゆき</sup>雪<sup>ゆき</sup>、直<sup>ち</sup>射<sup>やく</sup>日<sup>にっ</sup>光<sup>こう</sup>を<sup>し</sup>の<sup>ぐ</sup>こ<sup>と</sup>が<sup>で</sup>き<sup>ま</sup>す。屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>が<sup>あ</sup>る<sup>こ</sup>と  
に<sup>よ</sup>っ<sup>て</sup>、雨<sup>あめ</sup>や<sup>ゆき</sup>雪<sup>ゆき</sup>で<sup>ぬ</sup>濡<sup>ぬ</sup>れ<sup>て</sup>風<sup>か</sup>邪<sup>ぜ</sup>を<sup>ひ</sup>い<sup>て</sup>し<sup>ま</sup>った<sup>り</sup>、暑<sup>あつ</sup>さ<sup>や</sup>直<sup>ち</sup>射<sup>やく</sup>日<sup>にっ</sup>光<sup>こう</sup>に<sup>ち</sup>長<sup>ちやう</sup>時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>当<sup>あ</sup>た<sup>る</sup>こ<sup>と</sup>  
に<sup>よ</sup>る<sup>ね</sup>熱<sup>ね</sup>射<sup>しゃ</sup>病<sup>びょう</sup>を<sup>すこ</sup>少<sup>すこ</sup>し<sup>も</sup>防<sup>ふ</sup>い<sup>だ</sup>り<sup>す</sup>こ<sup>と</sup>が<sup>で</sup>き<sup>ま</sup>す。更<sup>さら</sup>に<sup>ベン</sup>チ<sup>チ</sup>が<sup>あ</sup>る<sup>こ</sup>と<sup>で</sup>、高<sup>こう</sup>齢<sup>れい</sup>者<sup>しや</sup>  
の<sup>かた</sup>方<sup>かた</sup>を<sup>は</sup>じ<sup>め</sup>、様<sup>さま</sup>々<sup>ざま</sup>な<sup>かた</sup>方<sup>かた</sup>が<sup>ま</sup>待<sup>まち</sup>ち<sup>じかん</sup>時<sup>し</sup>間<sup>かん</sup>に<sup>き</sup>休<sup>きゅう</sup>憩<sup>けい</sup>す<sup>る</sup>こ<sup>と</sup>が<sup>で</sup>き<sup>ま</sup>す。負<sup>ふ</sup>担<sup>たん</sup>が<sup>すく</sup>少<sup>すく</sup>な<sup>く</sup>な<sup>り</sup>も<sup>も</sup>っと<sup>か</sup>快<sup>かい</sup>適<sup>てき</sup>  
に<sup>す</sup>過<sup>お</sup>ご<sup>せ</sup>ると<sup>おも</sup>い<sup>ま</sup>す。

さ<sup>さ</sup>ら<sup>に</sup>、地<sup>ち</sup>域<sup>いき</sup>の<sup>かた</sup>方<sup>かた</sup>と<sup>の</sup>コ<sup>こ</sup>ミュニ<sup>に</sup>ケー<sup>けい</sup>シ<sup>し</sup>ョ<sup>う</sup>ン<sup>ん</sup>の<sup>ば</sup>場<sup>ば</sup>に<sup>も</sup>な<sup>る</sup>と<sup>おも</sup>い<sup>ま</sup>す。滋<sup>しが</sup>賀<sup>けん</sup>県<sup>ない</sup>内<sup>すべ</sup>全<sup>すべ</sup>て<sup>すべ</sup>の<sup>バ</sup>ス<sup>ス</sup>  
停<sup>てい</sup>に<sup>や</sup>屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>、<sup>た</sup>ベン<sup>ち</sup>チ<sup>ち</sup>が<sup>あ</sup>る<sup>こ</sup>と<sup>で</sup>沢<sup>たく</sup>山<sup>さん</sup>の<sup>ひと</sup>人<sup>つ</sup>が<sup>か</sup>い<sup>て</sup>き<sup>ま</sup>す。快<sup>かい</sup>適<sup>てき</sup>に<sup>な</sup>り、コ<sup>こ</sup>ミュニ<sup>に</sup>ケー<sup>けい</sup>シ<sup>し</sup>ョ<sup>う</sup>ン<sup>ん</sup>の<sup>ば</sup>  
場<sup>ば</sup>に<sup>も</sup>な<sup>る</sup>と<sup>おも</sup>う<sup>の</sup>で<sup>す</sup>が、い<sup>い</sup>か<sup>が</sup>で<sup>し</sup>ょう<sup>か</sup>。

## 質問 10

だれ 誰もが <sup>す</sup>過 <sup>がっこう</sup>ごし やすい 学校 に する ために

なかむら 仲村 春乃 議員（小5）、まつむら 松村 知美 議員（小5）  
こいけ 小池 憩 議員（中1）、たなか 田中 杏菜 議員（中2）  
やまだ 山田 捺琴 議員（中2）

わたし 自身、ほけん 保健室 登校 になり、きょうしつ 教室 に行く 際に まわ 周り から いや 嫌 な 目 で み ら れ る こ と が あ り、さ  
ら に い 行 け な く な っ た こ と が あ り ま し た。こ の よ う な た い け ん 体験 から ふ と う こ う 不登校 の イ メ ー ジ を か 変 え、み ん  
な が が っ こ う 学校 で <sup>す</sup>過 <sup>しがけん</sup>ごし や すい 滋賀 県 に な っ て ほ し い と お も 思 い ま す。

わたし 達 が が っ こ う 学校 で <sup>す</sup>過 して いて、が っ こ う 学校 や きょうしつ 教室 に 来 ら れ な い 人 が 少 し 増 え て い る と 感 じ ま す。  
じっさい 実 際 に、もんぶ 文部科学 省 が ちょうさ 調査 し た 「れいわ 令和 5 年 度 児 童 生 徒 の 問 題 行 動 ・ もんたい 不登校 等 生 徒 指 導 上 の  
しよくだい 諸 課 題 に 関 す る ちょうさ 調査 等 の 結 果」 に よ る と、2019 年 度 か ら 2023 年 度 ま で の 滋 賀 県 内 の 公 立  
しょうちゅうがっこう 小 中 学 校 で ふ と う こ う 児 童 生 徒 が 増 え つづ け て い る こ と が 分 か り ま す。そ ん な 中 で、ふ と う こ う 不登校 の  
こ 子 達 が まわ 周 り の 目 を き に せ ず に が っ こ う 学 校 に 通 え る よ う な ばしよ 場 所 が あ っ た ら い い な と かんが 考 え ま し た。

そこで、しがけん 滋賀 県 子 ども 県 議 会 に しゅつ 出 席 し て い た しょうちゅうがくせい 小 中 学 生 33 人 に アンケート を と り ま し た。  
アンケート の 内 容 は 「あ な た は、ふ と う こ う 不登校 に な っ た 子 が が っ こ う 学 校 内 で <sup>す</sup>過 ぐ ぞ う こ と が で き る ばしよ 場 所 を 知  
っ て い ま す か。ま た、そ の よ う な ばしよ 場 所 は あ な た の が っ こ う 学 校 に あ り ま す か」 で す。「し 知 っ て い る」  
と こと 答 え た 人 は 57% で、「し 知 ら な い」 と こと 答 え た 人 は 43% と な り ま し た。ま た「そ の よ う な ばしよ 場 所  
が あ る」 と こと 答 え た 人 は 27% で、「そ の よ う な ばしよ 場 所 は な い」 と こと 答 え た 人 は 67%、「あ る か ど  
う か わ か ら な い」 ま た は 「し 知 ら な い」 と こと 答 え た 人 は 6% で し た。わたし 我 達 の み ち か 身 近 で、ふ と う こ う 不登校 に  
なる じどう 児 童 や せいと 生 徒 が 増 え つづ け て い る に も か か わ ら ず、まわ 周 り の 目 を き に せ ず に が っ こ う 学 校 に 通 え る ばしよ 場 所  
の こ と を し 知 ら な い と こと 答 え た り、そ ん な ばしよ 場 所 は が っ こ う 学 校 に な い と こと 答 え た り し た 人 の 割 合 が 多 い こ と  
に、きき 危 機 感 を 感 じ ま し た。ほ か 他 に も、ふ と う こ う 不登校 に 対 し て ふ と う こ う 不登校 は た だ の あま 甘 え」「さぼり」「そ  
ん な ん だ と おとな 大 人 に な れ な い」と い う かんが 考 え 方 を 持 つ 人 も 少 な く は な く、わたし 我 達 は こ の よ う な  
かんが 考 え を へ 減 ら し た い と かんが 考 え ま す。

その ために、2 つ の ていあん 提 案 を し ま す。1 つ 目 は、かくがっこう 各 学 校 に 1 か 所、あ きょうしつ 空 き 教 室 等 に「だいに 第 二 の  
いばしよ 居 場 所」を せっち 設 置 し て ほ し い で す。「だいに 第 二 の 居 場 所」と は、きょうしつ 教 室 以 外 の 場 所 に、きょうしつ 教 室 に 入 り  
づ ら い 人 が、ひと 安 心 し て <sup>す</sup>過 せ る ばしよ 場 所 で す。こ の「だいに 第 二 の 居 場 所」を かくがっこう 各 学 校 に せっち 設 置 す る こ と で、  
きょうしつ 教 室 に 行 き づ ら く、きゅうくつ 窮 屈 な 思 い を し て い る こ も、が っ こ う 学 校 で 少 し は ゆ っ た り <sup>す</sup>過 せ る の で は な  
い か と お も 思 い ま す。

2 つ目は、不登校に対する理解を広げるためのパンフレットを作って、小中学生に  
配布することです。そうすることで、少しでも偏見がなくなり、教室に行った時に温かく  
受け入れてもらえ、不登校の子達が少しでも教室に行けるようになるのではないかと思います  
ました。こうした取り組みをすることで、不登校に対するイメージが少しずつ変化し、み  
んなが学校で過ごしやすい滋賀県になると思うのですが、いかがでしょうか。

## 質問 11

### より良い滋賀の交通 ～「Lake traffic tour」～

|                    |           |                   |        |
|--------------------|-----------|-------------------|--------|
| きよ しん ぎ<br>許 芯儀    | 議員（小4）、中村 | なかむら そうしろう<br>藏司朗 | 議員（小5） |
| にしむら あ せい<br>西村 空星 | 議員（小5）、古川 | ふるかわ るる か<br>瑠々花  | 議員（小6） |
| ふじわら こう ま<br>藤原 航真 | 議員（中1）、田中 | たなか りょうせい<br>亮成   | 議員（中2） |
| ひろせ あおい<br>廣瀬 葵    | 議員（中2）    |                   |        |

私たちは、滋賀県にある公共交通機関を、もっと若い人からお年寄りまで、幅広い世代に利用してもらいたいと思っています。滋賀県にはバスや船、鉄道などがあります。私たちは、公共交通機関を利用している人が少ないと感じています。長年滋賀県に住んでいますが、ここ最近、コロナの影響で公共交通機関の本数が少ないままだと感じています。このため、以前より乗り遅れたときに次の列車を長時間待つ必要があり「公共交通機関で移動する」という選択肢が減ってしまい、利用の機会も減っていると思います。

地域体験活動で訪れた近江鉄道さんでは、長年赤字経営であることも知りました。お客さんを増やすために、近江鉄道さんでは様々なイベントをされていました。そこで滋賀県全体の公共交通機関を使った「もっと多くの人が公共交通機関を利用する機会を増やすようなイベントを開催すれば、利用者が増え、それによって本数も増えるかもしれない」と考えました。

そして、ただ公共交通機関を利用するだけでなく、滋賀県の魅力も体験できる「Lake traffic tour」の開催を提案します。このツアーには、以下の3つの特徴があります。

1 つ目は、私たち子ども議員が電車やバスの中で滋賀県の公共交通機関についての授業を行うことです。ツアーの行程や見どころ、楽しみ方などを紹介するしおりを配り、滋賀県の公共交通機関の魅力を多くの人に知ってもらいたいと考えています。

2 つ目は、船に乗って昼食を楽しむ時間です。琵琶湖の形をした弁当箱には、特産品の近江牛や近江米、小鮎などが詰められています。子ども議員にアンケートを取ったところ、“うみのこ”という行事以外で船に乗る機会は少ないと聞きました。参加者同士がご飯を食べながら交流し、仲を深めることができる時間になればと思います。

3 つ目は、その船で沖島に立ち寄ることです。沖島では自然を間近で感じ、古来から続く伝統的な漁業について知ってもらいたいと考えています。また、美しい景色や伝統的な建物、古風な風景など、沖島ならではの見どころをたくさん知ってもらいたいです。

このツアーの3つの特徴や公共交通機関を実際に利用してみて、公共交通機関の魅力  
と滋賀県の魅力と合わせて県内外の多くの人に感じてもらい、興味を持っていただき、結果  
として公共交通機関を利用する人が増えると思うのですが、いかがでしょうか。